

総務、産業、建設常任委員会記録

招 集 年 月 日	平成28年11月28日（月）
招 集 の 場 所	議員控室
開 会	午後3時29分
出 席 者	委員長 我妻 薫 副委員長 山岸 三男 委員 千葉 一男 委員 藤田 洋一 委員 櫻井 功紀 委員 鈴木 宏通 委員 前原 吉宏
欠 席 者	
職務のため出席 した者の職氏名	議会事務局次長 佐藤俊幸
協 議 事 項	・農商工連携による活性化について
そ の 他	
閉 会	午後4時30分

2号様式 協議の経過

我妻委員長	大変、議会ご苦労さまでございました。 予定より大幅に遅れまして3時半からの開会になりました。農商工連携の活性化、いよいよお互いの意見を交換し合う内容に入ってきたのかなというふうに思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。 委員7名、全員出席しておりますので常任委員会は成立しております。 ただいまから農商工連携による活性化についての研究討議に入ってまいりたいと思います。 この間、視察あるいは意見交換、そして議会報告会用のまとめのほうに議論は集中してまいりました。 いよいよ、さっきも言いましたけれども視察等々、あるいは意見交換等を受けながら今後、当常任委員会としてどのようにこの活性化に向けて、特に農商工連携を軸とした政策提言をしていくのか、その内容について意見を交換してまいりたいというふうに思います。 初めに、ちょっと確認しておきたいと思いますが、今もう11月の末でございまして、もうすぐ12月会議も、もう半月後に迫っています。ということは目標としていました12月まで、なんとかまとめようということは、日程的にほぼ無理だろうというふうに判断せざるを得ません。 それで議長のほうとも確認しましたけれども、12月会議に必ず報告しなくてはならないというものでもないと思いますので。 一定程度の提言がまとまって、はっきり言えば12月は無理として、若干、今後検討、討議を続けて、できれば3月会議の前にまとめられればいいのかというふうに思いますが。 その辺の進め方についてどうでしょうか。 (「賛成です」の声あり) 日程的に12月会議というの、無理なのは、もうはっきりしているかと思えますので。 そういう進め方で。 (「賛成です」の声あり)
山岸委員	ということは3月会議までに出すと。
我妻委員長	うん。今から何回かやっぱり検討して。まとめるまで1回、2回意見出したからまとまる内容でもないような気がしますので。 3月会議といえば、やっぱり2月頃のまとめにできればいいなど、そんな流れになろうかと思いますが。 いいですね。 (「はい」の声あり)

	そういう進め方で。 櫻井委員。
櫻井委員	教育民生のほうは12月にまとめ出すの。どういう方向なの。
我妻委員長	なんか、その辺もいろいろ副議長に聞けば、いや教育民生もまとまらないな、なんていう話も。
櫻井委員	12月には間に合わないんだな、あっちも。
我妻委員長	本当は、教育民生は… ちょっと休憩します。
	休憩 15:32 再開 15:34
我妻委員長	再開します。 教育民生のほうも12月会議、無理なのではないかと。ただ、仮に教育民生が出したとしても、12月会議まで出すということではないと思いますので。付託案件ではないしね。
佐藤次長	そうですね。
我妻委員長	あくまでも常任委員会としての研究テーマ、この1年間の研究テーマをこういうのを掲げて継続してやりますということでの議長の承認なのでね。
佐藤次長	原子力のときは2カ年でやったということもありますしね。
我妻委員長	そうですね。 次年度の政策に反映させるタイミングとしては12月会議というのが一つの目標なのだけれど。ま、3月に間に合えば一定程度の次年度の政策反映、担当課のほうに伝えることも不可能ではないと思う。 そういうことで一応、2月にまとめられる方向でこれから意見交換を進めていきたいと思います。 それで今日ですが、どこまで進めたらいいか。 さっき言ったようにこれまで町内の生産者なり団体と意見交換をした、それらも踏まえて壮瞥なり八雲に行って視察で学んできた。それらがベースになろうかと思う。あと議会報告会で意見出されている点もあります。 それらを踏まえて今後の進め方として、今日、できれば皆さんからこの辺、提言として課題として上げたらいんじゃないかというのを一定程度出していただいて、次回それをさらに深めていくと。そういうふうになればなと思いますが。 今日もここで1本にまとまるというの、なかなか難しい気がしますので、

	まず皆さんの思っていることを率直に出していただくと。次回それらを少し集約しながら整理して深めていくと。 ですから今日ざっくばらんに、それぞれ今までを踏まえて思っていること、どんな課題を考えているのか、その辺をちょっと出していただいて、それを深めるのは次回にしたいというふうに思いますが。 いいですね。 (「はい」の声あり) 今日、出し合ってから討論する時間もちょっとないような気がするのですが。その辺、時間を見計らってやりますけれど。 いいですか、今もう1時間しかないのです。
藤田委員	農商工連携だけれども、農業はそのとおり壮瞥なり八雲なりに行っていますね。やはり商工人が一生懸命、主として取り組んでおられるということで、その中に行政も手伝っているのね。 わが町としても商工会の、北浦のナシなら若い人もそういう、なんか出てきて、もう少し活発にやりたいということもあるので、そういう関係の人が飛び込む中では、商工会をメインにして取り組んでいってはどうかと。 ということは商工会の中では川敬さんもしかり、もっと地元商工会の中にやっぱり溶け込んでもらいたいなと議会報告会の中で出されました。早く言えば地元の人がありながら、地元にもう少し。外ばかり見ないで地元のなにかしら川敬さんをもう少し出すようにしたらもっと違うのではないかというようなこと言われたよね。 そういうようなことを考えれば、やっぱり商工会を通じた、メインに進めるのも一つかなというふうに感じたところなのだけれどもね。
我妻委員長	そうだね。どっちも商工人がちょっと前に出てきましたからね。
藤田委員	本当に農業が一番、基本だとは思いますがね。
我妻委員長	鈴木委員。
鈴木委員	今、藤田委員が言ったとおり、もちろん商工会、今まで研修に出たとおり、そのとおり進んでいく町の取り組みなんかも見してきました。 私としては今、産業振興課で行っています人材育成、そして売れる商品についてなど月1回ごとにいろいろ研修等をしているようだけれども、もう少しこれの啓蒙活動を高めていって、例えば今、主に参加している方がやはり商工会の関係の方が多いという話を聞いていましたので、今、農家の方が2名ほど参加だという話でしたので、もう少し農家の起業というのではないですけれども、そういう売れる商品についての認識を持ってもらえるような。 そしてこれからTTPの絡みもありますけれども、さまざま変わる農政

	に対しての勉強会を含め、若手の育成を主に産業の中心に置きながら育成していくというところをもう少し深めていただいて、活性化に向けた下積みというのか、下作りをしていければなど。 それをまず私なりに提言していったらどうかと考えておりました。
我妻委員長	なるほどね。 梨部会でも若手の人たちからもかなり言われていました。 はい、ほかに。 前原委員。
前原委員	私的には商工会サイドなのですけれども、商工会自体は商業、工業との交流というのは割とあるのですけれども、農業者との交流というの、なかなか少ない現状です。 そういう意味で産業振興課が入るのが一つの方法なのですけれども、何かうまくマッチングの方法というのを考えるのがいいのかなと。 ま、商品開発にしてもいいですし、販路についてでもいいと思うし。この間、庄司先生がやっていた、そういう部分で今やろうとしていること、そういう部分、ちょっと研究するのも一つなのかなと思いました。 以上です。
山岸委員	櫻井さん、ないですか、何か。
我妻委員長	まず、今日はたたき台。
山岸委員	自由に今まで勉強してきた、いろいろ検証してきたことでこういうふうに進められれば、いくらかこっちのほうがいいのかとか。
我妻委員長	櫻井委員。
櫻井委員	やっぱり美里町としての特産物、六次加工、この商品については種類を多く作るとやっぱり消費者のほうに迷ってね。やっぱり一つか二つ、これだという美里町のブランド品を作ったほうがインパクトあったり消費者のほうにできるんじゃないかなと思います。 それからもう一つは農商工連携なのですけれども、農業で言えば生産者ですか、農業ばかりじゃなく生産者と加工業者との連携を図りながらお互いの利潤を。やっぱりどっちも利潤がなければできないから連携も。利潤も念頭に置きながら生産者と加工業者の連携が必要ではないだろうかと思えますね。 難しいかな。
山岸委員	千葉さん、どうですか。
我妻委員長	千葉さん、声出ますか。
千葉委員	悩むだけにします。
山岸委員	悩んでいるだけ、みんな悩んでいるの。

千葉委員	皆さんがおっしゃっているとおりと、まず思いますけれども総論的には。しかし具体的に活性化をするためにどういう行動を起こして、どういうステージを作るかということが、なかなかはっきり言って私のような頭では思い付かないと。 ただ、活性化していくのにやっぱり自分で独立するということに、リスクのことが一番頭にあるのではないかなと。だからその点を、リスクをどう補てんしてやるかという仕組みと、それから若手がやっぱり中心になってもらって、商人が一番行動力あるんですね、現実はどこ見ても。だからその辺の連携のステージをどう作っていくかということが必要だと思うのですけれども。 ただ口で言うのは簡単ですけれども、じゃ、具体的にいくなかなか思い付かないというか、具体化するところが私では難しい。 ただ自分で仕事をやろうというときに、リスクをどう補償するとか、安全、担保とか全部ではないけど、その辺をどう見てやるかということが収益活動の中では大きな要素だと私は思っています。新しいことやるということは。 ま、何言っているかわからないけれど、結局は若い人を中心にしてそういうふうな連携を、商業者を中心にしてリスクという問題を考えながらステージを作り上げていくことが必要じゃないだろうかという気持ちです。 大体、リスクがあるからできない。手を出せない。
我妻委員長	さっき鈴木さん言ったの、起業セミナーだね。
鈴木委員	そうです。
我妻委員長	始まったと。 これが農業者は今二人しか。
鈴木委員	前は、という話でした。
我妻委員長	前はね。 この前の確認した段階で。
鈴木委員	稲刈りが忙しかったのでという話で。
山岸委員	時期が悪かった。
我妻委員長	6回やるのね。
鈴木委員	またこれから。
我妻委員長	あと町でやっているという中には旧理容美容学校の跡地を使った、あれまだ・・・
櫻井委員	起業化でしょう。起業セミナー。
山岸委員	ああ、小部屋ね。

	「あっちは起業セミナー」の声あり。
山岸委員	あれ今、引き合いあるのか。
櫻井委員	今、工事中だ。
山岸委員	まだないでしょう。
我妻委員長	まだ公募していないんだね。
藤田委員	なんか二人ぐらいは公募が来たらしいよ。
櫻井委員	チラシあがったのではない。
藤田委員	二人だか来たの。
山岸委員	部屋は作ってあるんだね。
藤田委員	今、作っている最中だから。
山岸委員	まだ作っている。完成していないんだ。
我妻委員長	ちょっと休憩しますから。
	休憩 15:47 再開 15:52
我妻委員長	再開いたします。 今、起業化に向けた理美容学校の活用で若干、予定より遅れているよう ですけれども。何人かからは申し込みがあるようだけれども。
藤田委員	うん。あると言っていた。
我妻委員長	ただ、そういったものも一応、町でやっている起業セミナーなんかとあ わせて頭に入れながら、今後の意見反映にも含めていければなというふう に思います。 商工会の、さっき前原さんから出たけれど、あんまり農協と言うより も・・・
前原委員	農家との交流。
我妻委員長	農家との交流ね。そういったのをどうマッチングを図るかという。
前原委員	事業者として農家というのはどっちかというと農協のほうを見ていると 思うんです。 ただ、企業として捉えた場合は、ある意味では、流通に乗せるという意 味では商工会に入るのも一つの利点かなと思います。 ただ、そこに入っている農業者というのは残念ながら少ないと。
我妻委員長	商工会に入る・・・
前原委員	展開として。 ただ、残念ながらそういう農家というのはないわけですよ。企業化して

	いても商工会に入っているの、まず少ないよね。
我妻委員	一応、農業やりながら販売なんかに手を出している人でも商工会のほうとの連携にいかないで農協との関係が主だと。その辺どういうふうに商工会とのマッチングを図るか。
山岸委員	さっき前原君ね、商工会は商業部会、工業部会、あと企業会とか青年部、婦人部という、そういう組織体でなっているのだけれど。 今までも、今いいことを言ってくれたのが農業者あるいは生産者との商工会の理事とか、あるいは工業部会とか商工部会の理事さんたちとの意見交換会みたいな一回もないのだね。 これ一回やってみて、俺ら商工会の人が考えていることと、思っていること、あるいは農業生産者の方々が、梨部会なんかも若い人が何人かいたから、そういう方々との意見交換みたいなこと一回やると、温度差があるのか何が違うのか、そういうのがちょっと見えてくるのかなとすごく思ったのだけれどもさ。 そういうものの設定を。商工会でも農協でもいいと思うのだけれども、そういうのを提案するのも一つの案かなと思ったのね。
我妻委員長	それを町側が音頭を取ってやるということも。
山岸委員	うん。産振で音頭を取ってもらうとか、そういう方法もいいのかなと思ったのね。 それこそ連携しないと、なかなか生産者は生産者で、若手で今現在やっていることで目いっぱいなの、みんなね。
我妻委員長	前原委員。
前原委員	私もこの立場になって初めてわかったのですがけれども、結局、農家団体の人たちの農業委員会というのがありますよね。商工会には商工会の理事会というのがあるわけですよ。組織的には私、見てはイコールではないと思うのですがけれども。ただ、そういう団体同士をつなげる意味でそういう会をちょっとミーティングする方向で。
山岸委員	ちょっとその意味違うのだな。 ただ、農業委員会の場合はちょっと違うのだな。
前原委員	だけれども何て言うのかな、課題というのをお互いに出す場というのもあるのかなと。
我妻委員長	その辺、あともう少し深めて。 今のは直接、農業委員会とはならないということもあるかも。どういう場が作れるかね。そしてその中でみんなから出されているのは若手の育成。特に農業生産者の若手をどう引き留めることも、後継することもそうだし、

	それがどうこの町の活性化にうまくつながっていただけるか、そこを。さっき育成と出たけれどね。 ポイントとしてはそういう、はっきり言えば商工会と農業生産者との意見交換会などをどう作っていくか、これもあんまりなかったような状況だし。あとは生産者の若手の育成。それも共通すると思うのだよね。商工会の人が若手との場を作るというのか、行政がそういうマッチングするというのと。
鈴木委員	物産協があったり、花野果の運営組織の団体もあるだろうし。 今言った話の流れで、もし、そういうお話ができれば……
櫻井委員	農業法人もあるんだよ。
鈴木委員	それぞれ。青生にも1カ所ありますし、そういうところの方々の話もありますし。
我妻委員長	団体同士のそういう検討する場、研究する場、そういったものをやっぱり。今は、なんか見たらこういうのだけだから。どこまで活性化施設に向けて段取りしているのかというと、まだそこまでの動きが果たして… さっき言ったように農業法人なんかの本音を聞いているのか、ざっくばらんにね。あとはバラだってそうだよ。
藤田委員	ハニーローズだって今やっている人は、みんな年だから。60以上だから。 結局、若い人がいると言ってもなかなか後継者がいない。やっぱり製品、商品開発で化粧水とか、ああいうような補助金を利用しながらやればね。 そういうのを産業振興課とかと一緒にさせてさ。町の商工会に入って、そういうふう若い人たちが集まってくるなら、そういう施策を考えていけばいいんじゃないかなと。化粧品なんかは前から出ているものだから。できるのだから。 ただ、やっぱりリスクがあるから、俺たちこれで手いっぱいですと答えているけども、どんどんアドバイスやれば、そこそこ。あれだけの規模でやっているわけですから。 その辺はやっぱり、この辺でつなげてやっていくのが一つかなと思うけどね。
櫻井委員	そうだよ。何と言ったって町の町花だし、代表する花だから。
我妻委員長	この前ハニーローズに行って感じたのだけれど、そんなに町としてもハニーローズがどのようにやりたいのかということをあんまり聞いていないような気がしなかったですか。こっちからやってほしいというのはあったのかもわかんないけれど。 バラ祭りというのは結局、ハニーローズの人たちが主体的にやっているわけでしょう。町の花だからと支援をしているけれども。

	だから町がやってほしいこと、みんなから言われる、見える所にバラがね。栽培をどうするのかとなるとハニーローズさんなんかそういうのはちょっと難しいと言っていた。 だったらどうしたらいいのかという、もう少し突っ込んだ議論。
山岸委員	うん。そうなのね。 やり方だと思うのだけれど、ハニーローズさんに町内の小牛田とかにバラを植えてくださいと言ったら無理ですね、それは。 そうではなくて、苗木を提供してもらうとか。それを各行政区にお願いするとか、苗木の育て方とか指導をしてもらえばいい。 その内容まで行く前の段階だからね。
我妻委員長	各行政区からそういう団体でやってほしいところに、ハニーローズさんには今言われた栽培とか、そういう指導をね（「そうそう」の声あり）やってもらうような。町の苗木なんかも、そういった協力、どういう関係ができるか。
山岸委員	いろいろな提案を出して。
前原委員	流通ルートから言うと今、国内的にはかなりいろんな部分で縮小しているわけですね。店にしても細っているわけですね。店の構え自体もそうですし、従業員の数もそうですし。 例えばそういうハニーローズさんとか企業にしても冒険的な投資はなかなかできる時代になっていない。 なので、何が言いたいかというと、できることは何かと、逆に見つけて、それをマッチングして、みんなで探すのが一番手っ取り早いのかと。金を出したら何でもできるという時代ではないので。 例えば極端な話なのですけれども、味噌屋さんありましたよね。あれなぜ外を向いているかという結局、商売になる方向を向いてやっているわけですね。町内にも、もちろんそのとおり受けてはやっているのですけれども、相対的にはどっちがメインですかとなったときにそうなっちゃう。 同じように例えば小牛田地区だと渡辺採種場さん。前、町長さんと私と大橋さんと3人で行ったことがあるのですけれども、そのときにカボチャの話が出たんです。カボチャの苗、種というかその話が出まして、いや今、何がいいのですかと町長が話したらカボチャがいいと。カボチャがいいんだけど、この辺で売っているのですかと。いや、よく買ってもらうのは色麻とか小野田とかあっちのほうだと。高い値段でよそが作っていない時期に早めに作って、それを古川のピボットに出してかなり儲けていると。そういうことをやっているらしいです。 そういう部分を例えば我々は、それだったら地元で取り組みとして何か

	いいマッチングができればいいと。
我妻委員長	農家のほうには、まだまだ。
前原委員	かけ合ってくれないらしいです。
我妻委員長	一応アタックはしているの。
前原委員	例えばＪＡみどりのさんに話を出しても聞かないという話をしていました。
鈴木委員	南郷地区は主に転作のカボチャは面積大きいですからね。
山岸委員	カボチャと何種類かやって、実は大橋昭太郎さんとかも受けて赤字になったと。
前原委員	流通ルートまで作っているのがあっちの人。ピボットに置いてかなり高い値段で売れると。
藤田委員	生産ならいいけれど、販路が決まらなと。
前原委員	そうです。 そういうのを例えば我々が研究、どうやっているのかなと。
鈴木委員	うちのほうの議会報告会で一部あったのですが、かつて小牛田のときに小牛田菜やリンゴナシ、小牛田農林高校を中心に育種をしていただきながら産官学の三つの連携を取って、例えば学校、種屋さん、あと役場を中心にそういういろんな品種、品目に関してもいろいろやってきた経緯があると思うのです。 今、北浦リンゴナシというところが若干残っていますし、あと小牛田菜という名前でその当時、種屋さんが農林学校から行った種苗を種屋さんのほうで増やしていただきながら、そういう種苗を開発した経緯も。今からかなりの昔の話になりますが、そういう話もありましたし、例えばその当時、花のほうも小牛田カーネーションなどを主に多く作っていましたので、カーネーションなども学校で育種して（「やっているんだよね」の声あり）やっているのですけれども、その後、商品化に向けるまでに至らなかった原点が、前原さんが言うとおりの流通を通して商品販路をどう開拓していくかというところに、なかなか乗せられなかったというのがあるのです。 実際、生産とかそういう農家が手掛けたんですけれども、なかなかそこまでブランド品としての名前としては残らなかったのが、今に至っているのかなと。
山岸委員	そうなんだよね。
我妻委員長	それとさっき櫻井さんから出た、あんまり数、手広くしても。そういう要素も一つあるので。 でも町内にあるいろんな要素、それをもう一回確認し合って、そこでの連携がどう図れるのか。マッチングでね。その辺から整理してみる必要も。

前原委員	あと例えば流通でうまくいっているのは花野果です。農家の人たちが作ったやつを花野果で売ることによって管理して売る。
我妻委員長	花野果で加工品というの、どれくらいあるんだろう。農産物以外の。 （「赤坂さんとか」の声あり）
山岸委員	赤坂さんの六次産業。団子だとか餅だとか。 （「伊藤恵子さん」の声） お弁当だとか、（「お菓子屋も」の声あり）お菓子だとか。
我妻委員長	お菓子屋ってどこ、南郷。（「伊藤さん」の声あり）
山岸委員	あと、俺の家のそばの佐々木お菓子屋さんも一生懸命、揚げまんじゅうを供給しているのだけれど。 花野果が成功しているのは、やっぱり生産者と販売場所がうんと近いということなの。（「マッチングなんですよ」の声あり） 距離が近いと。ま、そういうことだね。 あと、せっかく小牛田農林、南郷高校、さらには渡辺採種取場と。美里町にはブランドなんだね、これもはっきり言って。ここからできる種とかそういうのに、これからお願いで美里町の名前を付けてもらおうとか。今、品種が 207 号とかなんとか数字の番号が付くでしょう。あれは開発の関係でそういう番号なんだろうけれど。それに少し美里の名前をアピールするような。
我妻委員長	町でそういう人たちが一同に会しての意見交換なんていう場を作っているのかな。 （「ないんでない」の声あり）
前原委員	花野果では、やっているかもしれないけれども。
櫻井委員	やっぱりブランドとか、六次加工でいいものができたとしても、やっぱり消費先の販路、それがなければ前にしぼんでいくんですよ。 だから私の近くの経済連で醤油、味噌作っているでしょう。鎌田さんでも醤油、味噌を作っている。鎌田さんなんかアメリカにも売っているんだね、あの醤油。販路、ウイノナに行っているんだもの。 こっちは農協経済団体の味噌、醤油だから。自前ではキャンペーン、年に 1 回やっている。生産して流通、消費先があるから。生協なんかにもいっている、トラックで。 経済連のほうは販路先があるから、どんどん地元従業員を使って豆なんかは中国からとって。
我妻委員長	中国から。
櫻井委員	中国だっけ、あの豆、何だったあそこ。 （「武陽か」の声）

	武陽。（「武陽食品」の声） だから、元木さん、亡くなったけれど、あの人の息子、今やっている。中埜だったかな。
我妻委員長	その辺になると、俺たち行った小島の味噌、自分で豆も。
櫻井委員	自分で販路を持っている人だね。
我妻委員長	そうすると、八雲ではないけれども本当の地元産の豆を使った味噌、醤油と。そういうところに目が向いてもらえばね、もっと美里町ブランドというの、なるんだろうね。よその豆をどう、地元産の農家の生産をふやすか。 そういう意見交換をする場というのは、本当は音頭を取らなくてならないのは、やっぱり行政だろう。 （「産業振興課」の声あり） その辺があまりされていなければ、これは我々、提言していく一つのポイントにもなっていく。
山岸委員	企業というのは鎌田醤油さんであれ、みんな自分のところで販路を求めたり出荷先があるのさ、ちゃんと。 それを今度、町として行政でどういうバックアップ、美里町ブランドとかレッテルとかラベルに少し美里町の名前とか、ちょっと変わった名前を付けてとか、そういうのを提案したり、それくらいでバックアップするしかないと思う。 個人の企業はそれぞれ、みんな独自に努力しているんだから。
我妻委員長	それを踏まえて、さっき山岸さんが言ったように、ほら、ハニーローズで言ったよね。今やっていることに対して、まず。あと前原さんも言ったけれど今の状況の中でやれること。みんなで町のあれに向けて、現状はこうだけれども、こういうことは協力できるとか、そういうみんなでやれることを意見交換できるような場、まずその場を作ること。まずそこからだよ。 今、副委員長が言ったように、こういうブランドをやってくれという前にね。みんなそれぞれ営業をやっているから、すぐそれをこっち向けろというのはできることないはずなので、さっきの組合醤油だって、そういう豆を使っているのに、すぐ美里の豆を使えなんて言ったって。生産者もないから。 そういう雰囲気はどういうふうに醸成していくのか。
前原委員	だからやっぱり産振が音頭を取って、それに物産協とか絡むとか。それで町としてのブランドを作ると。
我妻委員長	なんか今の産振を見ていると特化したものだけ。

前原委員	補助金、補助金というイメージしかないよね。
我妻委員長	そうだな。
山岸委員	結局、国、県の補助金を町内でどういうふうにかこうやるかしかないよね。 新しいアイデアでない。
前原委員	みんな、ちょっと集めて、何かできることやりませんかみたいな。 そういう場所を。
我妻委員長	それをやっていたのは壮瞥だっけ、そういう集まる場を提起して。
山岸委員	ある程度、40代くらいまでの、最大50代くらいまでの、いわゆるプレイヤーと言われる、まだやる気のある人たちの意見交換できる場所を設けてどういうふうにしたらということをお願いしたい。 結局、梨部会でこの間言ったのは、自分たちの課題と若い人たちこういうことやりたいという希望と課題と問題だけが出て、それを町でどういうふう支援できるのかと言ったら、梨は梨の苗木ですという話になるよね。
前原委員	一番ネックなのは生産量が決まっているわけだから。
山岸委員	うん。そうなのね。
前原委員	ふやすというのは、だからまず不可能。 だから要はマッチングなんです。マッチングの中で。
我妻委員長	ちょっと皆さんから出してもらったけれど。 大体、共通的に、まず町にいろんな生産者、商工団体とか、いろんな企業があって、今それぞれで手いっぱいだという状況。それを踏まえながらも、それをじゃ、一つまず町の産業活性化にみんなで協力してもらえ方向の意見交換、そういう場をまず町が音頭取って作っていかうという方向は大体、皆さんから出されてきているのかな。 その中に、じゃ、若手の生産者育成とか、そういうのが入ってくるし、あとは地元の豆とかの栽培とか、派生してくるかと思うのだけど。 そういうものをどう皆さんの意見の中でマッチングさせて、それを皆さんのできることから協力できる場をどう醸成していくか。 今やっていることに加えて、もう少し町のほうでそういう、「音頭取る場」の声あり）音頭を取る。 その方向でもう少し次回、今出されたようないろんな、ま、出ているのは学校と渡辺採種場の活用とか。いろんな団体あるんだよね。果たしてそれらのどういうふうなマッチングを考えていくのか。その辺を少し柱にしながら次回、もう少し詰めて膨らませていくというか、今出なかったところなんかも含めて。あとは、さっき言ったお菓子屋さんなど個別にやっているところも結構あるわけ。そういう人たちも一回、どういうふうにしたらそういうマッチングの場を作れるのかも含めて、町にどういう提言した

	らそれがより実践しやすいのか。 その辺もう少し次回、詰めて深めていくということで。
山岸委員	やっぱり、むしろ企業のほうはいろんな情報を集めたり、流通とか一生懸命考えてやっているわけ。町から提案なんて無理だから、逆に企業さんから町のほうはこういうふうなことで支援してほしいとか、こういうふうなやり方も町で考えてほしいと言ってもらったほうが絶対いいと思う。
櫻井委員	それらをしてもらうためにも、やっぱり。
山岸委員	一回ね。
藤田委員	町で32年以降に延長になったのだけれども、それを視野に入れて、やっぱりやっていかなければいけないんだから。
我妻委員長	あくまで町の産業振興課がこれやってほしいというのではなくて、やっぱり、そういう出された意見の中で、どういうことをやったらそれをやりやすくできるのかとか。 （「そうそう」の声あり） それで町ができること、それぞれの生産者ができることは…。 この前、ナシでも出たけれども、観光農園やってもいいみたいな若手だっているわけだ。そういうのをやるために条件としていろいろ出てくるわけだから。町ができるのかとか、あるいは近隣の農家の人たちがどんな協力し合えばできるのかとかね。高齢化して、ナシは自分の庭でやっているのが多いから、なかなか集約できないという課題もあるけれども。でも俺のところとあそこは少し広がるから一緒にやってもいいよとか。 みんなできることを出し合えるような場をどう作るかなんだよね。
藤田委員	報告会でも言われたとおり、行政としてもバックアップしてくれと。若い人たちが出てきているのだから、それを議会で言ってくれと言われた。
我妻委員長	北浦でね。
藤田委員	うん。あなたたちの役目だろうと言われたから。
我妻委員長	そういうのが出てくるような場をまず、どういうふうに引き出せるようにできるか。その辺を、方向性を持ちながら次回、少し具体的な討論に深めていきたいということで。 今日はその程度でいいですか。 （「はい」の声あり） なんか本会議の疲れが… いいですか、じゃ、次回それ…（「我々の活性化も必要だ」の声あり） 頭が活性化しないものだから。
山岸委員	これは、あとはどうするの。次回もこれ、ある程度、予定…。
我妻委員長	最初に確認したように12月会議はちょっときついの。

櫻井委員	3月、2月頃までに。
山岸委員	2月頃までに方向を出さなければならないから。 1月からだね、常任委員会。
我妻委員長	次回の日程だけは、まず確認して。
山岸委員	12月は無しね。
櫻井委員	無しということはない。
山岸委員	やるの、12月も。 一回くらいやるんだね。
我妻委員長	12月13日から12月会議でしょう。
櫻井委員	19日か、では。
我妻委員長	15日までだから。 19日は第2分科会か。
山岸委員	9時半に入っています。
我妻委員長	第2分科会、午前中だけ。
山岸委員	うん。 9時半、午前中です、19日。
我妻委員長	午後は空いているじゃない。 （「はい」「いいよ」の声あり）
山岸委員	19日、月曜日、常任委員会。 （「事務局は」の声あり）
我妻委員長	事務局、空いていますか。 （「オーケーだそうです」の声あり） じゃ、さっきのようなことを少し深めていくということで、次回は12月19日、1時半。 （「はい」の声） じゃ、今日のところは以上で終わりたいと思います。 副委員長、お願いします。
山岸副委員長	大変お疲れさまです。 総務産業建設常任委員会、今日11月会議が終了後ということで、短時間で終了させていただきました。 皆さんから今、意見をいただいたことについて、12月19日の月曜日、皆さんもそれぞれまた帰ったらある程度まとめていただいて、こういう方法、ああいう方法ということを検討していきたいと思いますので、よろしくお願ひしたいと思います。 今日は、この辺で終わりたいと思います。 大変ご苦労さまでした。

	閉会 16：20
--	----------

会議の経過を記載して相違ないことを証するため、ここに署名する。

平成 年 月 日

総務、産業、建設常任委員会

委員長